

長唄『藤娘』

これは大津絵の藤の枝を肩にした娘の姿を舞踊化したもので、華やかで可愛い作品。

大津絵とは、江戸時代、琵琶湖のほとりで売られた戯絵のことである。

—歌詞—

わかむらさき と かえ
〽 若 紫 に十返りの
はな あらわ まつ ふじなみ
花を 現す松の藤波

ひとめ がさ ぬりがさ
〽 人目せき笠 塗笠しゃんと
ひとえだ
振りかたげたる一枝は

むらさきふか すいど
紫 深き水道の水に

ゆかり
染めて嬉しき由縁の色の

い
愛としと書いて藤の花

—解説—

若紫＝藤。
十返りの花＝松の異名。

松の花は百年に一度、千年には十度咲くということから、この様に言われる。

松に藤の枝がからんでいて、松の緑と、藤の若紫色の対照的な色彩美をにおわしている。

◆振◆ 板付、照明はカットイン。
板付とは、演者がすでに舞台にいる状態で幕が開くこと。演者の登場は、暗転の中、鼓のポポポポポポ・・・ポンという最後の音をキッカケに、照明をパッと明るくカットインする方法を用いる。

◆振◆ 黒い塗り笠をかぶり、藤の枝を肩にした娘（藤の精）が舞台中央にいる。

藤娘が、笠をかぶり、藤の枝を肩にかついでいる見た目の様子。

紫は、江戸を代表する色。
水道の水＝江戸の水。
当時の江戸っ子は、水道の水で産湯をつかったと自慢するほどであった。

由縁の色＝紫。

「い」を10個縦に並べて書き、いの字の間を上から「し」の字で貫くと、藤の花になるから、この様に唄われている。【図1】参照。

ええ しょうがいな
^{すそ}裾もほらほらしどけなく

^{かがみやま}
へ 鏡山

人のしがより此の身のしがを

かえりみるめの^{しお}汐なき海に

^{むすめすがた}
娘 姿の恥ずかしや

^{おとこごころ} ^{にく}
へ 男 心の憎いのは
^{ほか} ^{おなご} ^{かみ}
外の女子に神かけて

^{あわづ} ^み ^い ^{かねごと}
栗津と三井の予言も
堅い誓いの石山に
^{うつせみ} ^{からさき}
身は空蟬の唐崎や

待つ夜を他所に
^ひ ^ら ^{おうせ}
比良の雪解けて逢瀬の
^{ねた}
あた妬ましい

ようもの瀬^せ田^たに
わしゃ乗せられて

◆振◆ 藤の枝をかついだ娘は一度下手へ引込む。
かぶっていた黒い塗り笠を手に持ち下手より登場。

大津市の近くにある山の名前。

しが=欠点。
人の欠点より、自分の欠点を鏡に映して顧みること。

かえりみるには、反省の意味と、海藻の^{みる}海松^め
布がかけてある。
汐なき海=琵琶湖

◆振◆ まだ成熟しない若い娘の、もどかしいような何とも言えない心情を描いている。

◆振◆ 二つ紋のついた^{ちりめん}縮緬の手ぬぐいをもつ。

ここからクドキである。
まだあどけない艶っぽさがあり、浮気っぽい男心を恨む女心の歌詞から始まっている。

他の女には会わないと固い約束をしても、その約束の中身は蟬の抜け殻のように空っぽだ、というような意味。

逢瀬をかわしたいと、好いた男と待つ、まだ初々しい娘のもどかしい気持ちがよまれ、その心情が妬ましいという言葉に含まれている。

瀬田=舌。
いいかげんな話にのせられて。

ふみ かただ かただよ
文も堅田の片便り

こころやばせ
心 矢橋のかちごと

いたこでしま まこも
潮来出島の真孤の中に
あやめ咲くとはしおらしや

サアよんやさ サアよんやさ

う じ しぼふね はやせ
宇治の柴船 早瀬を渡る
わたしゃ君ゆえ のぼり船

サアよんやさ サアよんやさ

しなもよや
はな
花にうかれて ひとおどり

う ありま
松を植よなら有馬の里へ

植えさんせ いつまでも

ちぎ ど づま
変わらぬ契りかい取り棲で
よれつもつれつ

手紙を出しても、返事をくれない、一方通行の手紙。

かちごと＝恨み事（愚痴）。

◆振◆ 正面奥へ引っ込み、手ぬぐいの踊りは終了。次の場面は扇子を持って踊る。

ここから潮来節である。

『藤娘』の原曲にはなかったが、後から加わった。

唄・三味線と、篠笛のゆったりとした趣向が心地いい音楽である。

潮来節は元来、常陸（茨城県）行方群潮来町でできたものと言われている。

潮来出島は、その水郷の中にある有名な出島のこと。

ガラリとかわって踊り地になる。

◆振◆ 上手へ引っ込み、扇子を置き、藤の柄の笠をかぶり、それとおそろいの振出笠を両手に持つ。両肌脱ぎをして、再び上手から登場。

この部分は、「松になりたや 有馬の松に 藤に巻かれて寝とござる」という有馬節によせたもの。

有馬節とは、元禄正保の頃の流行り唄である。

松は男、藤は女にも例えられる。

かい取り棲は、遊女などが道中する時、つまをかかげること。

まだ寝^ねが足らぬ
宵寝^{よいね}枕^{まくら}のまだ寝が足らぬ

藤に巻かれて寝とござる

ああ何としようか
どしようかいな

わしが小枕^{こまくら} お手枕^{てまくら}

〴〵空^{そら}も霞^{かすみ}の夕照^{ゆうでり}に

名^な残^{ごり}惜^おしみて帰^{かえ}る雁^{かり}がね

◆振◆ 両手に持った振出笠を、3 段に振りだし、踊る。
より一層華やかな様子になる。

◆振◆ 上手に引っ込み、上手より藤の枝を引きずって再登場。

日もかたむき、空も夕照になっている情景描写。

【図 1】 いとしと書いて藤の花の絵。



「い」を 10 個書く。

「い」の間を貫くように「し」を書く。

いとしの藤 完成！！

画像提供
花ノ本海 画伯

※ この解説は主に、日本舞踊全集を参考にまとめており、この中での◆振◆の説明は『花ノ本海による日本舞踊観賞会』での踊りに限ります。なお、『藤娘』の衣裳・小道具は、別記にでご紹介いたします。